

## ガリバー旅行記にみられる 性的な笑いについて (Ⅱ)

三 浦 謙

(「ラピュータ」<sup>(1)</sup>, バルニバービ<sup>(2)</sup>, グ  
ラブダブドリッブ<sup>(3)</sup>, ラグナグ<sup>(4)</sup>およ  
び日本<sup>(5)</sup>渡航記」と「フウイヌム国渡  
航記」のばあい)

本論では、ひきつずき、「ガリバー旅行記」の第三篇と第四篇にみられる性的な笑いを問題にするが、本題に入るに先立ち、まず前回冒頭で触れた「ガリバー旅行記」四篇類別の経緯について二、三申し添えておきたい。それは本論をもって、「ガリバー旅行記」全篇の性的な笑いを締めくくりにあたって、全貌を的確に捉える上からも肝要と思われるからである。ガリバーが遍歴したそれぞれの国で、ガリバーがおかれていた立場によって、第一篇と第三篇、第二篇と第四篇に類似点が認められることは、前回指摘したとおりである。ただ、この類似点が第一篇と第三篇よりも、第二篇と第四篇に、むしろ顕著にみられるのは注目に値する。この点については、ガリバーが渡航にさいして利用した船の名称が一つの示唆をわれわれに与えているように思われる。第一篇と第三篇では、カモシカ号<sup>(6)</sup>、ホープウェル号<sup>(7)</sup>という別名の船をガリバーは利用するのに、第二篇と第四篇では、アドヴェンチャー号<sup>(8)</sup>という同名の船でガリバーは出帆するからである。だが、このような暗示的な趣向とは別個に、仔細に検討してみると、第二篇と第四篇のほうに類似点が濃厚にみられることがわかる。第二篇と第四篇では、大人国と馬の国という相異はあるが、どちらの国においても、ガリバーは終始、並々ならぬ劣等意識に苛まれ、おのれの性情をし

んそこ慨嘆しているのである。ところが、第一篇と第三篇では、いずれも、ガリバーは余裕をもって相手を観察しているものの、第一篇では、反面、ガリバー自身、ダイナミックに活動しているのに、第三篇では、ガリバーは常に観察者の位置に止まって、決して舞台に上ることはないからである。

このような類似点の濃淡は性的な笑いにも当然、異同を生ずる。では、第一篇と第二篇にみられた性的な笑いが、第三篇と第四篇ではどのような形であらわれているか、更めて本題に入ることにする。

第三篇で、ガリバーはラピュータ、ラグナグ、クラブダブドリッグと漫遊し、最後の日本では、たいへん好遇された上、ラグナグ国王の名に免じて踏絵を逃れるという要領のよいところもみせるが、ガリバーが歴訪した、これらの異国のうちで、叙述にもっとも力点が注がれているのは、はじめのラピュータである。そして性的な笑いも、このラピュータとその首府であるラガードにかんする記述にもっぱらみられる。リリパットのよう、四つの具体例をここにあげることができる。はじめのは性器、二番目は浮気女、三番目と四番目はスキヤトロロジーにかかわる。最初のはラピュータにみられる一つの慣行である。ラピュータ人は数学と音楽がなによりも好きで、通常は思索に耽っているので、日常の業務を行うのに、いつも、叩き役という召使いを必要とする。このき叩役は、常時、主人の傍にいて、主人の目や口や耳を叩いて、対話中注意を促すのであるが、この召使が携えている叩き棒が連枷のようなもので、その先端についているのが、なんと、豆と礫が中に入っている膀胱なのである。召使が膀胱で主人の顔を叩き、叩かれた主人がハッとして目を覚すというのだからふるっている。

I observed here and there many in the habit of servants, with a blown bladder fastened like a flail to the end of a short stick, which they carried in their hands. In each bladder was a small quantity of dried pease or little pebbles. With these bladders they now and then flapped the mouths and ears of

those who stood near them...it seems, the minds of these people are so taken up with intense speculations, that they neither can speak, nor attend to the discourses of others, without being roused by some external taction upon the organs of speech and hearing; for which reason, those persons who are able to afford it always keep a flapper (the original is climenole) in their family, as one of their domestics, nor ever walk abroad or make visits without him. (p. 201 Chapter 2)

「のめる<sup>(9)</sup>」という外題の落語のまくらに、頭を叩かれないと口がきけないという癖の持主が出てくるが、これはそれよりも上手である。

二番目のは秀抜である。浮気女といっても、これはラビュータの首相夫人であるから、いってみれば名流夫人のご乱行である。ラビュータの男性はどれも叩き役を連れた夢想好きであるから、女房連は不平たらたらである。首相夫人といえども、その例に洩れない。あるとき彼女は保養という名目で邸を出てから数ヶ月間というものの行方知らずになった。とうとう国王の搜索令が出て、ようやく首府ラガードのいかがわしい料理屋にすることがつきとめられた。彼女はそこで不具の下男の情婦になりさがって、ボロボロの身装をし、連日、男の打擲を甘んじてうけていた。寛大な主人が一切の過去は問わないという条件で、引取ったが、暫くすると、どういいうわけか、女は、またぞろ、家を脱け出す。こんどは、ありったけの宝石を持出して男の許へ走ったというから、ガリバーならずとも女の気紛れには、ただただあきれるのほかはない。

I was told that a great Court lady, who had several children, is married to the prime minister, the richest subject in the kingdom, a very graceful person, extremely fond of her, and lives in the finest palace of the island, went down to Lagado, on the pretence of health, there hid herself for several months, till the King sent a warrant to search for her, and she was found in an obscure eating-house all in rags, having pawned her clothes to maintain an old deformed footman, who beat

her every day, and in whose company she was taken much against her will. And although her husband received her with all possible kindness, and without the least reproach, she soon after contrived to steal down again with all her jewels, to the same gallant, and hath not been heard of since.

(p. 208 Chapter 2)

三番目と四番目は共にスキヤトロジーで、ラガード所在の学士院で行われている専門研究の一端である。ある古参の学者は組合から毎日大樽一杯分の人糞の供給をうけて、人間の排泄物を原食物に還元する研究を行っている。彼は手や服を黄色く染めながら、着色や臭気を除いて、汚物を成分ごとに分離させることにより、原食物への還元をなんとかモノにしようとしている。

The projector of this cell was the most ancient student of the Academy. His face and beard were of a pale yellow; his hands and clothes daubed over with filth....His employment from his first coming into the Academy was an operation to reduce human excrement to its original food, by separating the several parts, removing the tincture which it receives from the gall, making the adour exhale, and scumming off the saliva. He had a weekly allowance from the Society of a vessel filled with human ordure, about the bigness of a Bristol barrel.

(p. 224 Chapter 5)

また、ある教授は反政府陰謀と排泄物との相関関係を研究している。くさいと思う人間がいたら、ただちに、そのものの排泄物の色、匂、味、濃度を検査すべきだと彼はいう。なぜならば、人間、上廁しているときほど、真剣にモノを考えるとときにはないからだ。

Another professor showed me a large paper of instructions for discovering plots and conspiracies against the government. He advised great statesmen to examine into the diet of all suspected persons; their times of eating; upon which side they

lay in bed; with which hand they wiped their posteriors; to take a strict view of their excrements, and from the colour, the odour, the taste, the consistence, the crudeness or maturity of digestion, form a judgement of their thoughts and designs. Because men are never so serious, thoughtful, and intent, as when they are at stool, which they found by frequent experiment. (p. 236 Chapter 6)

このような第三篇にみられる性の笑いと第一篇のそれとを比較したばあい、ガリバーのおかれた立場の相異がそのまま、性的な笑いにも映しだされていることがわかる。スキットロジーにまつわる笑いにしろ、性器にかかわるくすぐりにしろ、第三篇が一般的ないしは学術的であるのにたいして、第一篇は個別的である。前者がラピュータ人一般の風俗もしくは学術研究の一端として性的な笑いをとりあげ、ガリバーはそこでは傍観者として局外に止まるのにたいして、後者では、ガリバーは常に、笑いの舞台の中心に位して生彩を放っている。それだけに第一篇のほうがガリバーの体験が直接読者に感応して興味深い。ただ、第三篇は一般的であるだけに、そこにはユニークな挿話を盛り込む配慮もうかがえる。それは、たとえば、すでに述べた首相夫人のご乱行である。これは臆想好きの亭主族に業を煮やして、ラピュータではどの女房も亭主のいる前で平気で情人とイチャックというラピュータの女房気質の変則的な現れだが、特殊事例だけに、ガリバーが介入しなくても、際立っておもしろい。

第四篇の「フウイヌム国渡航記」ではどうであろう。ガリバーが最後に訪問するこの異様な国では、フウイヌムとよばれる馬が道徳的傾向の強い理性的動物で、ヤフーという不快極まりない下等動物が人間そっくりなのを知ってガリバーは啞然とする。自然の完成物といわれるフウイヌムの所作は、ここでは全く性的な笑いの対象にはならない。不潔で、すさまじい食欲をもつヤフーがガリバーを愚弄するところに歪んだ性の笑いがみられる。最初の例はガリバーがフウイヌム国に上陸直後、はじめてヤフーに出会うときのくだりである。

When the beast felt the smart, he drew back, and roared so loud, that a herd of at least forty came flocking about me from the next field, howling and making odious faces; but I ran to the body of a tree, and leaning my back against it, kept them off, by waving my hanger. Several of this cursed brood getting hold of the branches behind leaped up into the tree, from whence they began to discharge their excrements on my head: however, I escaped pretty well, by sticking close to the stem of the tree, but was almost stifled with the filth, which fell about me on every side. (p. 270 Chapter 1)

樹にのぼった数匹のヤフーにガリバーは頭から汚物を浴せられる。プロブディンナグでは、跳びこえるのをしくじって、山のような牛糞の中にズボリ落ちこんだり、面前ですさまじい侍女の小便をみせつけられたりするが、このように頭から糞便をかけられるのは、ガリバーにとって初めての経験である、しかも、この汚物はガリバーがもっとも忌み嫌うヤフーの排泄物であるから、牛糞とか、侍女の小便どころの騒ぎではない。

このヤフーがいかに不潔であることと因縁が深いかは、病気にかかったヤフーの治療法をみるとわかる。ヤフーは病気にかかると、かれらの糞便を混ぜ合せたものを無理やり口から押しこまれる。ヤフーにとっては、これが一番の特効薬なのである。

だが、三年に亙るフウイヌム国滞在中、ガリバーにとって、もっとも、おぞましい体験は、つぎにあげる水浴中の珍事であろう。

Being one day abroad with my protector the sorrel nag, and the weather exceeding hot, I entreated him to let me bathe in a river that was near. He consented, and I immediately stripped myself stark naked, and went down softly into the stream. It happened that a young female Yahoo, standing behind a bank, saw the whole proceeding, and inflamed by desire, as the nag and I conjectured, came running with all speed, and leaped into the water within five yards of the place where

I bathed. I was never in my life so terribly frightened; the nag was gazing at some distance, not suspecting any harm. She embraced me after a most fulsome manner; I roared as loud as I could, and the nag came galloping towards me, whereupon she quitted her grasp, with the utmost reluctancy, and leaped upon the opposite bank, where she stood gazing and howling all the time I was putting on my clothes.

(p.p. 314-315 Chapter VIII)

プロブディンナグで侍女に真裸にされて、ふところに抱かれた時とは大違いである。プロブディンナグでは侍女の体臭に辟易するに止まるが、この水中の変事で、ガリバーは人間存在の醜悪さをいやというほど見せつけられる想いがする。ガリバーに抱きついてきた牝ヤフーの所業は決して変態的ではなかった。ガリバーを同種族と思いこみ、自然な欲情に駆られて、その拳に及んだのだ。そして、ガリバー自身この時はじめて、手も足も顔も、すべてヤフーと同一であることを実感するのである。プロブディンナグでは侍女などに玩具扱いされて愚弄されるガリバーにわれわれは苦笑させられるが、ここでは人間の獣性を目の前にして、われわれは愕然とせざるをえない。

結局、スイフトにとって性的な笑いは単なるコミカルな技巧ではなかったのだ。性的な笑いという、笑いの一面に限っても、スイフトはなかなかの曲者であった。第一篇から第四篇まで読み進んだものは、だれしも顔の筋肉が硬ばる思いがしよう。スイフトは読者があるいは破顔一笑させ、あるいは苦笑させ、あるいは失笑させて、最後には奈落の底に突き落す。スイフトにとって、性的な笑いは人間存在の痛烈な批判に通ずる一つの武器だったのである。

注(1) Laputa 浮島または飛島。この島の住人ラピュータ人は、島を前後左右もしくは上下に自由に操作できるのだが、このラピュータ人というのが一風変っている。彼の頭はいずれも左右いずれかへ傾いていて、眼は片方が内側へ、もう一方が真上を向いている。そして、始終なにか思索に熱中していて、叩き役に叩かれないと、日常の用が足せない。これはニュートンをも含めて、当時の科学

者を諷したものといわれている。

- (2) **Barnibarbi** : 飛島の国王の支配する大陸一帯の総称で、首都 **Lagado** の大きさは **London** の半分ぐらい。
- (3) **Glubbudubdrib** : 魔法使の島、大きさは **the Isle of Wight** (イギリス海峡にある島) の $\frac{1}{3}$ ぐらい。この島に住む種族は酋長以下残らず魔法使。
- (4) **Luggnagg** : この王国に **Struldbugg** という不死人間がいる。生れたさいに不死人間であるかないかは、左の眉毛の上に約3 ペンス銀貨大の赤い痣<sup>あざ</sup>があるかないかでわかる。この不死人間は三十歳ぐらいまでは常人と変らないが、それ以後はただ、死なないというだけで、漸次意気消沈してゆく。八十歳になると一切の仕事から離れ、九十歳になると歯と頭髮が脱落し、記憶力が極端に衰え味覚も食慾もなくなる。ガリバーはこのような不死人間に接して、永生にたいする願望を一挙になくしてしまう。
- (5) 日本 : ガリバーが日本にきたことがあるのだから愉快である。1709年5月21日、まずザモスキ (鹿児島のことか) に上陸する。**Luggnagg** 王からの親書を携えていたので、国賓扱いにされて、江戸では日本国皇帝に拝謁を許される。後、長崎に赴く。長崎ではうまく踏絵をのがれた上、450トンのアンボイナ号 (**the Amboyna**) というオランダの船で帰国の途につく。これはとりとめもない一つの挿話にすぎないが、ガリバーの短い日本滞在は、ガリバーファンの日本人には、なかなか興味のある事柄である。
- (6) **the Antelope** : トン数不明。南洋航路の船で船長は **William Prichard**. 1699年5月4日, **Bristol** 出航。
- (7) **the Hope-well** : 300トン。船長は, **William Robinson**. 1706年8月5日出航。出航地不明。
- (8) **the Adventure** : 第二篇では船長は **John Nicholas** で、1702年6月20日, **the Downs** 出航。トン数不明。第四篇では、ガリバー自身が船長となり、1710年9月7日, **Portsmouth** 出航。この船は350トン。ただし、これは第二のばあいと同名の船ではあるが、同一の船であったかどうかは判然としない。
- (9) 「二人ぐせ」という別題もある。「のめる」ということばは縁起が悪い。のめってくだれば行きだおれだし、身代がのめれば身代かぎりというわけで、つい、このことばを口にしてしまう男がもう一人の別の癖の持主と、罰金をかけあって、このことば癖を直そうとするが、結局直らないはなし。

## 参 考 文 献

Allan Bloom : *An Outline of Gulliver's Travels from Ancients and Moderns* edited by Joseph Cropsey. New York. © 1964 by Basic Books Inc.

Samuel H. Monk : *The Pride of Lemuel Gulliver from The Sewanee*

1978. 1      ガリバー旅行記にみられる性的な笑いについてⅡ（三浦）      53（723）

Review, LXIII（1955） pp. 48-71. Sewanee, Tenn. © by the  
University of the South

Jonathan Swift : Gulliver's Travels, The Penguin English Library 1972.

興津要編：古典落語（大尾）講談社文庫